

はじめに

日本の美術館でも近年、小・中学生がグループで作品の前に座りギャラリートークを受ける姿が珍しいものでなくなってきた。鑑賞学習の充実や博物館利用を奨める学習指導要領の告示から七年が経ち、「スクールプログラム」がようやく定着した感がある。

私自身も、教育担当学芸員(エデュケーター)として、国立美術館の「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」に十年間携わり、鑑賞教育が急速に広がる様をつぶさに見てきた。しかし新しい分野であるがゆえに、未だに多くのエデュケーターや教員が「鑑賞教育の指針や方法論が充分ではない」「学校のカリキュラムと美術館教育の間に齟齬がある」と感じていることも事実である。特に、「鑑賞教育で子どもは何を学ぶのか」「子どもの年齢にあった作品選択や鑑賞方法があるのか」「美術館ならではの学びとは何か」などは、研修会などでよく聞かれる問いである。

平成二十四年度から行った科研究費研究「註1」美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発<sup>1</sup>は、これらの問いに応えようとするものである。研究は、

国立美術館と博物館で行われている教育普及プログラムの広がりや特性を把握する、<sup>2</sup>その所蔵作品を使って学校との連携授業を行う、<sup>3</sup>海外美術館のスクールプログラムを調査し、エデュケーターを迎えてのフォーラムとワークショップを開催する、<sup>4</sup>研究成果としてウェブ上に鑑賞プログラムを公開する、という4つの段階を踏んだ。本稿は、<sup>3</sup>のうち米国「註2」と豪州「註3」での調査と招聘によって得た知見をまとめ、あわせて<sup>4</sup>を紹介するものである。

### 探求的活動を基盤とした美術鑑賞

米豪の美術館での鑑賞活動の主流は、Inquiry based appreciation (探求的活動を基盤とした美術鑑賞——探求的な鑑賞)と呼ばれる、展示室での活動である。探求的な鑑賞は、子ども自身による観察や発見、知識や経験、発想されたイメージや推理を原動力として進められる。活動の中心は、作品の前で子どもとファシリテーター(進行役)が相互的に語り合うギャラリートークであるが、ギャラリアクティビティと呼ばれる活動や、鑑賞ツール、ゲームなどを組み合わせることもある。

一般的には、十人程度の子どもを、エ

デュケーターかボランティアが務めるファシリテーターが引率し、テーマを絞って三四作品を鑑賞することが多い。開かれた質問、つまりイエス/ノーで答えるのではない、「何だろうか?」「なぜ?」「どんなふうにか?」といった質問から始まる。ファシリテーターは子どもが発言を確認したり、「どこからそう思ったの?」と根拠を聞いたたりしながら会話を進め、タイムミングを見計らって作品情報を提供し、話題をさらに掘り下げ、テーマへと関連付けていく。

アクティビティは子どもの年齢を考慮して行われる。ポーズをまねたり、詩作や作文、素描や探し物をしたり、音楽を聴くことによって、子どもはより主体的に作品と関わるができるようになる。

このような探求的な鑑賞は現在、子どもと作品との関係を深める最も有効な手段と位置づけられている。探求的な鑑賞には、ジョン・デューイやハーワード・ガードナーの教育哲学や、構成主義の「学習者主体」という考え方が影響していると言われる。「一方向的な解説」から「相互的な対話」への移行は、鑑賞教育におけるこの二十年ほどの最も顕著な変化といえよう。

### 作品情報をどう扱うか

日本でもよく知られたVisual Thinking Strategiesという教授法では、批判的思考力の育成を優先し、最後まで作品情報(知識)を与えないことが多い。しかし探求的な鑑賞では、作品理解のために外してはならない「作品情報」があると考えられる。例えば、田中敦子の抽象絵画を鑑賞するとき、作者が電気服によるパフォーマンスを行っていたという情報は欠かせないと考え、エデュケーターがタイムミングを見計らって話す「図1」。この場合の情報提供は、鑑賞のゴールではなく、鑑賞を深めるための



図1 ヘザー・マクソン(ホイットニー美術館教育部プログラムディレクター)によるワークショップ、ガイドスタッフが参加。井上絵美子(国立新美術館)によるコーディネート(平成27年3月、東京国立近代美術館)。



図2 シャロン・バスキー（グッゲンハイム美術館教育部ディレクター）によるエデュケーター向けのワークショップ。大高幸によるコーディネート（平成27年1月、東京国立近代美術館）。



図3 ゲーナ・パネピエンコ（ビクトリア国立美術館教育部長）による講演。寺島洋子によるコーディネート（平成26年9月、国立西洋美術館）。

プロセスである。優れたファシリテータは、入念に下準備したうえでギャラリートークに臨み、どのタイミングでどの情報を与えるべきかを常に考えている。作品理解のための情報を厳選して伝えるということは、コレクションを通して美術文化への理解を使命とする美術館にとって、バランスのとれた判断であるといえよう。

### 美術館と学校をつなぐ「テーマ」

複数の鑑賞作品を貫く「テーマ」は、コレクションと学校カリキュラムを繋げるものでもある。米豪の美術館のウェブサイトをのぞくと、教育のページ、*From*（幼稚園から高校まで）の項目の中などに *school*、*school* の申し込みフォームが見つかる。こ

こに、その地域の学習スタンダード<sup>註4</sup>が反映された「テーマ」が複数並んでいるので、教員は子どもの年齢と授業の目的にあわせて選択することができる。

例えば、メトロポリタン美術館は百科事典的なコレクションを活かし、小学校二年生が教科横断的に学ぶ「コミュニティ」をテーマに、パプアニューギニアの集会所の板絵、中世英国の儀式用武器、中世キリスト教絵画を見せるプログラムを用意している。近現代美術コレクションの MOMA では、小学校五年生向けに「キヤラクター」というテーマで、ロダン、ウォーホル、バーネット・ニューマンの三作品を鑑賞する。同様のコレクションのグッゲンハイム美術館にも似たような「アイデンティティ」というテ

マがあり、ルノアール、ピカソ、ブライス・マーデンを、九十分かけて対話的に鑑賞する。ブルックリン美術館では「女性」をテーマにジュディ・シカゴの大作を鑑賞し、小学校高学年向けの美術科または社会科の授業としてジェンダーについて話し合う。

このように、鑑賞教育に関連する科目は、実は美術科のみにとどまらない。オーストラリアのビクトリア国立美術館では、哲学の授業として高校二年生がロスコの作品を探索的に鑑賞する。社会、国語、外国語、科学、音楽など、美術以外の教科にまたがる、または多教科を統合する鑑賞プログラムの開発には、多くの美術館が意欲的に取り組んでいるところである。

地域や国家の教育方針が、探求的な鑑賞のテーマに反映される場合もある。オーストラリアの全国共通カリキュラムには、国民が学ぶべき現代的課題として、アボリジニなど先住民族の歴史と文化、アジアとかかわり、サステイナビリティ、という三事項が掲げられているが、シドニーやメルボルンの美術館ではこの三事項に対応するテーマが用意されている。

### 美術館ならではの学び

これらからわかるのは、美術館での学びが、すでに「美術を学ぶ」ことを超えて「美術を通して学ぶ」ことへと拡大していることであろう。子どもが美術館で学ぶのは、

作家や技法や歴史といった教科的知識だけではない。それよりも鑑賞のプロセスで養われる、見ることへの好奇心、作品世界に入ってしまうような想像力や共感、自分の考えやイメージを伝えるための言語力、描かれているものから推測していく論理的思考力、友達の意見を自分なりに受け止めるための批判的思考力などが、鑑賞の学びとして注目されているのである。

これらが、リアルな「実物による学び」として行われるだけでも、美術館に向く価値があるとされる。しかしホンモノであることだけが価値ではなく、複数の作品が、ある文脈のもとに展示されていることも、文化や多様性を学ぶうえで大切なことで、それはまた美術館であるからこそ可能なことといえる。体系化された教科教育という学校の学び（フォーマルな学び）が、探求的な鑑賞を通じて統合されインフォーマルな学びとなることに、美術館で鑑賞教育を行うべき理由があるといえよう。

### 鑑賞教育キーワードmap

ここまでで取り上げた米豪の事例については、そのまま応用できるものばかりではないにせよ、これまで日本に多くの影響を与えきた国の現状として参考になる点が多い。コレクションと学習スタンダードを結ぶテーマの設定、作品選択のよりどころ、作品情報の伝え方、アクティビティ、



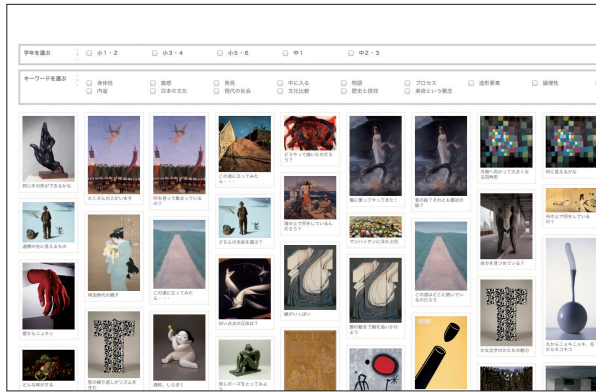


図4 「鑑賞教育キーワードmap」<http://kanshokyoiku.jp/keymap/index.html> 設計：室屋泰三

オンラインの活用などを、日本の状況に照らし合わせ、研究成果としてウェブに公開したパイロット・プログラムが「鑑賞教育キーワードmap」[図4]である。主に小・中学校の教員が、「どの学年に」、「どの作品を」、「どのように」鑑賞授業すればよいか考えるためのサイトとなっている。

このプログラムを作るにあたり、まず検討しなければならなかったのが、探求的な鑑賞でいうところのテーマに代わる機軸である。日本の学習指導要領は、学習スタンダードのように学年横断的で具体的な学習テーマが示されてはおらず、発達段階別に学習課題が記されるという構造になっている。そこで、鑑賞する際に子ども

がみせる姿を「キーワード」として学年別に整理し、そこにコレクションを当てはめていく方法をとった。例えば、小学校低学年のキーワードのひとつは、ポーズをとるなどしてすぐに作品と一体化しようとする「身体性」であり、ロダンの「考える人」や高村光太郎の「手」が紐づけられている、といった具合である。

基本設計図としてまず作成したのが、「鑑賞学習と発達の関連表」[註5]である。学習指導要領や解説書、教科書等が基になっており、発達や学習課題と作品選択の関係性を捉えやすくしている。表の横軸には小学校低・中・高学年、中学一年、中学二・三年の五つの発達段階が、縦軸には「子どもの姿(発達の特性)」、「鑑賞対象」、「鑑賞の方法」、「学習課題」、「キーワード」、「用語」が、それぞれ並ぶ。

「鑑賞教育キーワードmap」にアクセスすると、トップページに東京国立近代美術館(本館・工芸館)、国立西洋美術館、東京国立博物館のコレクション四十九点のアイコンが配される。「学年」を選んでクリックすると、その発達段階に適した作品が抽出される。15個の「キーワード」のどれかをクリックして作品を絞ることもできる。作品毎のページには、解説や鑑賞ポイントとともに、ギャラリートーク事例、アクティビティ、子どもの発言などが記されている。特長として、時代・地域・技法などの分

野の異なるコレクションを幅広くカバーしていること、各美術館で蓄積された鑑賞方法が作品ごとに紹介されていること、拡大に耐えうる高精細画像なので電子黒板やタブレット端末を活用して授業に使えることが挙げられる。

#### おわりに

コレクションを活用した美術館教育に関して、今回の海外調査で確認できたことは、美術館ならではの「実物資料による学び」の特性を活かし、「探求的な鑑賞」「学習者中心」を活動理念として、「クリティカル・シンキング」、「美術を通しての学び」、「美術以外の教科教育へのつながり」が目指されていることなどである。対話的な鑑賞を実践できるスタッフの養成や、教員研修などの学校教育へのサポートも十全である。さらにオンラインを活用し、コレクションの画像や最新の研究など教育事業のあらゆるリソースが提供されているさまは、すべての人に芸術に親しんでもらおうとする、社会教育機関としての強いメッセージの頭れと受け取った。

研究成果の公開は、平成二十六年年度末の数回のフォーラムとウェブ・プログラムの公開でいったん区切りをつけたが、現在、研究期間を一年間延長し、フォーラム内容の掲載と、プログラムの実践・検証を行っているところである。(企画課主任研究員)

#### 註

- 1 平成二十四〜二十六年度基盤研究(B) 24300315、一條彰子(代表)、今井陽子、上野行一、奥村高明、岡田京子、寺島洋子、藤田千織、藤吉祐子、細谷美宇、室屋泰三。
- 2 平成二十五年二月〜三月、大高幸のコーディネートによる。
- 3 平成二十六年三月。
- 4 日本の学習指導要領にあたるもの。米国ではスタンダード(市、州、全国共通)、豪州ではカリキュラム(全国共通)またはシラバス(州)。
- 5 <http://kanshokyoiku.jp/keymap/keyword-map.pdf> 原案：奥村2015

次号予告 2015年10-11月号 10月1日刊行予定

## 現代の眼 614

Re: play 1972/2015 — 「映像表現'72」展、再演 栗木達介展

Review MOMATコレクション特集「誰がためにたたかう？」

2015年8月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 613号  
編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館  
制作：光村印刷株式会社  
発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館  
〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561

表紙：山下菊二《あけぼの村物語》1953年  
油彩・ドンゴロス 137.0×214.0cm 東京国立近代美術館蔵

東京国立近代美術館賛助会員(MOMATメンバーズ)  
SEIKO セイコーホールディングス株式会社 鹿島建物 三菱商事